



日本整形外科スポーツ医学会 ニュースレター

No.12 2013年1月31日発行

■ 第38回日本整形外科スポーツ医学会学術集会開催報告

会長 筒井 廣明

第38回の本学会は、2012年9月14日（金）～15日（土）の2日間にわたり、横浜市のパシフィコ横浜で開催させて頂きました。メインテーマは「スポーツと整形外科の Cross-Link」とさせて頂き、スポーツと整形外科が密に繋がるための整形外科の各分野でのスポーツ医学への取り組み、各種スポーツ競技別の整形外科の係わり、整形外科医とスポーツ選手の間を埋めてくれている理学療法士やアスレティックトレーナーとの連携の大切さなどについてシンポジウムやワークショップを組むと共に、スポーツ整形外科医として知っておいて頂きたい事柄について各種セミナーを組みました。

参加者は、整形外科医（本学会会員516名、非会員283名）、コメディカル347名、その他を含め1282名と、主催者サイドを入れると1300名を超える人数になりました。参加者の内訳で本学会の会員が最も多く500名を超え、非会員の整形外科の先生方も300名弱と多くの整形外科の先生方が参加され、更に、コメディカルの方々を引き連れての参加も多く見られ、会場の各所で楽しげに語らいをされている光景が見られました。

総演題数は376演題で、シンポジウム、パネルディスカッション、教育研修セミナー、ランチョンセミナー、Traveling Fellow 報告などの指定演題201演題、一般口演138演題、ポスター37演題を6会場で2日間、活発な討議をして頂きました。

本学術集会はスポーツと整形外科という2つのキーワードを根幹とする学術集会ですので、各部位別の学術集会とは異なり、横断的な分野も大切になります。そこで、競技別のセッションを野球、テニス、オリンピックのメディカルサポート、ラグビー、バレーボール、アメリカンフットボール、ゴルフなどで組み、現場で行われている徒手医学、アスレティックトレーナーの活動、スポーツ歯科、



図1：開会式の様子

学校体育への関わりなど、部位別の学術集会では組み難いけれども、スポーツ選手の治療に携わるスポーツ整形外科医としては知っておいて頂きたい知識を学ぶ内容も入れさせて頂きました。ワークショップでは、関節鏡と超音波診断を取り上げましたが、学術集会の会場でも関節鏡に関しては、肩・肘・手・脊椎・股・膝・足等の部位別のセッションを取り上げ、また、超音波に関しては、スポーツとの関わりのパネルディスカッションや野球肘健診のセッションなどでもその有用性について取り上げさせて頂きました。

今回の学術集会の指定演題は、腰椎の西良浩一先生、テニスの別府諸兄先生、奥平修三先生、バレーボールの林光俊先生、野球の帖佐悦男先生、岩間徹先生、ゴルフの浜田純一郎先生、アメリカンフットボールの藤谷博人先生、徒手医学の寛田司先生、8月12日に終了したばかりのロンドンオリンピックは奥脇透先生、中嶋耕平先生など、本学会の理事、代議員の先生方を中心に多くの先生方のご協力によりあふれんばかりの企画を

表 1. 医学生と若手医師が語るスポーツ医学

前田 雄洋	宮崎大学	医学生としてのスポーツ医学—学生のためのスポーツ医学セミナー—を経験して—	スポーツ医学 啓発賞
橋本 健司	慶応義塾大学	腓腹筋内側頭有限要素モデルの開発と臨床画像に基づく妥当性の検証	最優秀発表賞
軸屋 良介	群馬大学	J1 クラブチームにおけるスポーツドクター・トレーナーの役割	スポーツチームサポート賞
森 俊太	岡山大学	西日本医科学生総合体育大会（西医体）の主管をして	スポーツ大会 安全運営賞
込山 和毅	群馬大学	高校野球投手のメディカルチェック実習に参加して	未来の星飛雄馬を救った賞
土山 耕南	兵庫医科大学	私の理想とするスポーツ整形外科医	アスリートコンディショニング賞
八尋 美阿	昭和大学	私が考える、スポーツ整形外科医の在り方	スポーツ整形 障害予防への貢献賞
太田 聖也	弘前大学	医学生野球選手の投球障害と原テストおよび下肢タイトネス、筋肉量との関連	大学野球 投球障害の解明賞
西本 雄飛	昭和大学	医師になって感じたスポーツ医学	スポーツドクター 体感ケア賞



図 2: 特別セッション「投球障害を考える」の講師陣



図 3: 特別セッション「投球障害を考える」の会場風景

提案して頂きました。そして、稲垣克記先生と富田一誠先生が中心になって海外からの招待講演を交渉していただき、ラグビーワールドカップの日本招致を実現させた森喜朗元内閣総理大臣の講演(図1)は鈴木一秀先生、膝のセッションは高木博先生、股関節は扇谷浩文先生、AT 関係は加賀谷善教先生、スポーツ歯科は船登雅彦先生というオール昭和チームを西中直也先生、上原大志先生、松久孝行先生がまとめてくれたことでプログラムが出来上がりました。

1 日に行われた医学生と若手医師が語るスポーツ医学の特別セッションでは9名の演者が講演をされ、表1のような賞を全員懇親会の場で表彰させていただきました。素晴らしいスポーツ整形外科医になってくれることを期待しています。全員懇親会終了後の特別セッション「投球障害を考える」では、予定外のゲストの飛び入りも有り(図2)、300名を超える参加者が大いに楽しんで討論

に加わって頂きました(図3)。2日目のポスター発表では、理事の先生方に投票していただき、表2の2名の先生方を優秀ポスター賞として閉会式で表彰させていただきました。

参加者数は初日の午前中で1000名を超えるまでになりましたが、各会場の参加者数(表3)をみると、バラツキが大きく、セッションの組み方及び会場の大きさ設定などの難しさを感じました。6会場で並行して行われているセッションについては聞くことが出来ないわけですので、少ない会場数で聞き逃すことが少ないようなプログラムの学術集会が本来の姿かもしれないと感じました。また、部位毎の学術集会はそれぞれにあります。競技種目別のセッションはこのような学術集会でこそ行われるべきと考えていただいた企画が好評でしたので、本学術集会を契機に各競技の選手の治療に興味のある人達の「人の輪」が育ち、スポーツ整形外科としてのチー

表 2. ポスター発表 優秀賞

田鹿 毅	群馬大学	高校野球投手における肘関節症状と SICK Scapula Syndrome との関連について
掛川 晃	帝京平成大学	第 5 中足骨骨折の発生部位による特徴

表 3. 各会場の参加者数 (セッション開始後 10 分)

第 1 会場: 68~280 名
第 2 会場: 16~177 名
第 3 会場: 25~217 名
第 4 会場: 13~237 名
第 5 会場: 28~342 名
第 6 会場: 18~306 名

ム医療を培う学会として発展させていただければ幸いです。

最後に、本学術集会の開催に漕ぎ着けるまでに至らぬ点多々あり、多方面の方々にご迷惑をおかけしまし



図 4: 運営スタッフに感謝を込めて

たことをお詫びすると共に、本学術集会にご参加いただいた方々、協賛・協力いただいた各社・医療機関の方々と運営スタッフ (図 4) に深謝いたします。

■ 第 39 回日本整形外科スポーツ医学会学術集会開催について

会長 大塚 隆信



第 39 回日本整形外科スポーツ医学会学術集会を 2013 年 9 月 13 日、14 日の 2 日間、名古屋駅前のウインクあいち（愛知県産業労働センター）にて開催させていただきます。伝統ある本学術集会を名古屋市

立大学大学院整形外科学教室がお世話させていただきこととなり、誠に光栄に存じます。教室を代表し、深く感謝申し上げます。

近年のスポーツの普及に伴い、スポーツはレベルや年齢、性別を問わず多くの人々に親しまれるものとなっています。スポーツの目的は、その活動を通して肉体を強化し、身体を健康を維持、向上させるとともに、フェアプレーの精神を学び、競技力向上のために努力することによって、精神面において成長することであり、スポーツによって健康が阻害されるようなことがあってはなりません。このようなことから、スポーツによる障害や外傷を未然に予防し、またその治療を積極的に行って、早期のスポーツ復帰を実現することを目標に、『予防、治療、復帰、三位一体のスポーツ整形外科を目指して』をテーマとさせて頂きました。現在のスポーツ医学の発達にはめざましいものがあり、科学的根拠に基づいた健康管理やトレーニング法を通して、より高いレベルのスポーツ選手の育成に貢献しています。本学術集会においても、毎年、スポーツ損傷に関して、数多くの研究成果や治療方法が発表され、活発な討論が行われ、各種スポーツ損傷の診断技術や治療について格段の進歩がみられます。また、整形外科スポーツ医、スポーツドクターといわれる医師の存在も知られるようになってきました、しかし、各種メディアによる運動やスポーツに関する情報は必ずしも正しいとは言えないものもあり、また、スポーツ選手、指導者と医師との交流はまだ十分とはいえない状況にあります。東海地方は、教育や行政の努力や安定した経済的基盤、温暖な気候にも恵まれ古くからスポーツ振興がはかられ、

これまでも数多くのトップアスリートを輩出してきました。スポーツのメッカでもある名古屋の地で、本学術集会を通じて最新の正しいスポーツ医学の情報を提供し、スポーツによる外傷、障害を予防するとともに、早期治療やスポーツ復帰を可能とする整形外科スポーツ医の神髄を探求したいと思います。

本学術集会では基調講演、特別講演、招待講演（海外）、教育講演、シンポジウム、ラウンドテーブル、ランチョンセミナーなどを企画する予定です。さらに、スポーツの現場や臨床で活躍できるスポーツ整形外科医師を育成する目的で、スポーツ損傷の診断、治療、アスレチックトレーニング、コンディショニングに関するワークショップを企画する予定です。浅学非才の身ではございますが整形外科スポーツ医学の発展のため全力を尽くしたいと存じます。諸先生のご支援とご教示を頂きますことを心よりお願い申し上げます。

なお、本学術集会の情報は逐次下記 HP にアップロード致しますので、ご確認のほどよろしくお願い致します。

■ 学術集会のホームページ

<http://www.congre.co.jp/jossm2013/>

■ 演題募集期間

平成 25 年 2 月 6 日（水）～3 月 21 日（木） 正午
演題はすべてインターネットを利用したオンライン登録

■ 事務局

名古屋市立大学大学院医学研究科 整形外科

■ 事務局長 後藤 英之

〒467-8601 名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄 1
TEL: 052-853-8236 FAX: 052-842-0266
E-mail: jossm13@med.nagoya-cu.ac.jp

■ 運営事務局

株式会社Congre中部支社
〒460-0004 名古屋市中区新栄町 2-13
栄第一生命ビルディング 6F
TEL: 052-950-3369 FAX: 052-950-3370
E-mail: jossm2013@congre.co.jp

■ 第 19 回日本整形外科スポーツ医学会の思い出と課題

第 19 回学術集会 会長 田島 直也

今回、高岸憲二理事長から本会の思い出や本会に関する意見、要望について執筆依頼がありました。私が会長として本会を主催したのは平成 5 年 7 月 22～23 日であったから、約 20 年近く経過したことになります。

本学会の当時の会員数は約 1,400 名の整形外科医から成り立っており、学会出席も 1,000 名を目標にしたものでありました。学会プログラムは、一般演題 106 題、シンポジウム 2、パネル 1、ポスター 54 題、教育研修講演 3 題、外人講演 5 題から構成、シンポジウムⅠは『下肢のバイオメカニクス』（座長：井上教授（岡山大）、緒方教授（福岡大））（図 1）、シンポジウムⅡは『脊椎のスポーツ障害』（座長：茂手木教授（東邦大）、原田教授（弘前大））（図 2）、パネルディスカッションは『スポーツ現場における整形外科スポーツドクターの役割』を取り上げました。シンポジウム座長の緒方教授、原田教授が既に御逝去されているのは誠に痛恨の極みであります。

外国からの招待講演は、教育研修講演① Lyle J. Micheli (Harvard Medical School U.S.A.)、② Sung Man Rowe (Chonnam University Hospital KOREA)、③ KWON ICK HA (National Police Hospital KOREA) による 3 題が行われました。

しかしこの時の学会開催の大きな特徴として、参加者へスポーツアクティビティに参加してもらったことあります。すなわち、ゴルフ、テニス、乗馬、ジョギング、サイクリング、マリンスポーツ（ダイビング、クルージング）と多くのスポーツを企画し、参加者には夫々満喫してもらったと思っています。（図 3）

20 年前と比較して変わったことは、社会全体の少子高齢化が進んだことがあげられます。しかし、学童期においてスポーツ愛好者とスポーツを行わない人に 2 極化されている事、又高齢化とともに寝たきり等の人が増えている事も問題であります。前者に対しては全国的に運動器検診が、後者は整形外科スポーツ医が中心になりロコモ運動が行われていますが、今後一層推進していく必要があると思います。

一方、日医認定健康スポーツ医、日整会認定スポーツ、日体協公認スポーツドクターを一本化することを目標に、



図 1



図 2



図 3

中嶋先生（日医）らと相当の期間会合を重ねましたが、
ついに一本化はなりませんでした。

しかし、各種のスポーツドクターはそれぞれの理念に
基づいて行動し、社会貢献する必要があると思います。

又、日整会スポーツドクターは整形外科領域のスポー

ツ外傷、障害の予防、診断、治療にあたるだけでなく、
自身も何らかのスポーツを率先して行いスポーツとの関わり
を大事にして、継続して行ってもらいたいと思っています。

■ 第 22 回本学会開催の思い出

第 22 回学術集会 会長 林 浩一郎

第 22 回は筑波大学が担当することとなり、1996 年 8 月 28～31 日に行った。このうち学術集会は 29、30 日で、28 日はスポーツ実践第 I 部のゴルフ、29 日後半にスポーツ実践の第 II 部、31 日は市民公開講座であった。この学会はスポーツ実践があるのが特徴だから、体育学群を持つ筑波大学としては大学の紹介にも絶好の機会と考え、どんなスポーツ種目にも対応して実践していただくということを最大のうりとした。実際筑波大学ではまずあらゆる種類の学生スポーツ活動が行われており、当然それに対応する施設がある。ヨット・ボート関係には霞ヶ浦があり、スキーには他県となるがザウスがある。従ってどんなスポーツ種目の要望にも学生コーチつきで対応しますというのは筑波大学の最大の強みを活かした学会になるだろうと考えた。ただ会期は当然施設が使える夏休みとなり、おまけにオリンピックと SICOT が 8 月前半から半ばまでであったので、必然的に 8 月最後の週となった。

28 日学会前夜全員懇親会を行なうにつき、アトラクションにも筑波しかできないものと考え、終ったばかりのアトランタオリンピックでのシンクロチームの活躍振りを銅メダルを取った本間美和子さんの解説で大スクリーンで観賞してもらった。テレビでも活躍した本間さんの歯切れのよい解説は大変好評で、競技者しか知らない数々の苦労や練習裏話などまことに興味深かった。

スポーツ実践についてはあらかじめ参加される先生方の希望する種目を伺ってあったが、アメリカンフットボール、野球、バスケットは希望があまりに少なく、学生の練習と一緒に加わってもらおうかも考えたが、多分体力的にかけ

離れていて怪我でもされては困ると第 2 希望に回って頂いた。希望がもっとも多かったのはテニスでこれはナイターで学生部員を数名付けダブルスで存分にプレーして頂いた。弓道も初体験の先生が何人かいらしたが学生の指導で熱心に練習された。水泳にも女子部員を指導につけた。サッカーは本ちゃんでない学生をいれて数を補って混成チームを作り試合を楽しんだ。ゴルフは前日茨城ゴルフコースで実践 I を行なったが、それではまだ飽き足りない方も多く、近くのショートコースをおさえてコーチつきで回って頂いた。学生・グラウンドの手配その他に走り回ってくれた教室スタッフには感謝あるのみである。

スポーツ実践に比べ学術の方は記憶からかなり抜け落ちてしまっているが、手元の資料によると主題として①スポーツの身体特性と障害特異性②アスレティックリハビリテーションとスポーツ復帰③スポーツ外傷と MRI の 3 題を募集した。いずれもかなりの数の演題応募を頂いて有り難かった。多くの先生がチームドクターとしても活躍されていることを考え、チームドクターの集いも学会行事に加えたが、要望のあったスキードクター会議のみ 20 名程度の参加を得て第一日目昼休みに開催した。

振返ってこの学会はいつの学会も学術より実践の方が印象に強い。新緑の軽井沢で濃霧の中でのゴルフの方が翌日快晴下に回ったスコアよりずっとよかったとか、神戸のゴルフでベリアのお陰で思いかけず優勝して丁度買い替え時期だったシューズを頂いたことその他枚挙にいとまがない。知識のみならず、楽しみと友人を与えてくれた本学会に感謝している。

■ 球(タマ)を忘れた山男

第24回学術集会 会長 赤松 功也

高岸理事長、酒井先生より執筆のご依頼を頂き、はたと困惑。理由は小生にはこれという華々しいスポーツ歴が皆無に等しいからである。先の大戦中、“弾丸(タマ) たまに頭(あたま)に当たる、たまにたまげると、こりゃたまらない”などという反戦戯れ歌(ざれうた)は聞いたことはあるが、およそ球技とは無関係な青春時代を過ごし、唯一の思い出は麻布中学に入学時、同校の弱小野球部の入部テストを受け落選したことぐらい。これには後日談があり、その後入学した慈恵医大で先輩として偶然その麻布の野球部のキャプテンと再会、その時の入部拒否を謝罪された。しかし元来、未来の職業として医師を選択していた小生、健康第一という自意識は強く持ち続けていた。そして入学後に入部したのが山岳部、そのきっかけは入試時の口答試問に遡る。時の試験官は学祖高木兼寛先生の一族で後の学長樋口一成先生だった。着席するや否や水泳で鍛えられた頑健な体格から発せられたのは開口一番「きみ、随分と痩せてるね、大丈夫か」と。ここで落ちてはならじと大声で「大丈夫です」と答えたがこのシーンは今もって思い出している。

そこでの医師としての決意は学業は無論であるが問題は頑健な体力形成法である。しかし格闘技や水泳は不得手、その他では圧倒的に球(タマ)が関係しているものが多く、こちらは過去における印象が悪い。そこで選んだのがただただひたすら歩くスポーツと考えた山岳部。忍耐と脚力、そして自然との触れ合いなどと軽い気持ちで臨んだ小生、新人歓迎会の席では“健康とスマートな体型を作るための入部”とほざいて先輩諸氏の失笑を買ったが、その笑いの意味は後に痛いほど知ることになる。まずは新人訓練としての北アルプスでの雪渓におけるアイゼンの着脱、ピッケル操作等による滑落防

止法、ザイルを用いた岩壁登攀(とはん)や懸垂(けんすい)下降などそれこそ命懸けの訓練を徹底的に叩き込まれた。これが小生のタマ無しスポーツ開始の所以である。

その証拠と言うのには一寸憚れるが、このたび1961年に入会した日本山岳会から本年、つまり2012年5月付で永年会員の呼称を許された(年会費無用)。因みに小生の会員番号は5378(コサナキヤ)で覚えやすい。なお現在の日本山岳会の会員数は約15,000人である。

さて一般にスポーツ医学の範ちゅうには“タマ”を中心とした球技が多くその他は格闘技、体操競技、徒歩、ランニング等々多種あり、これらの治療や予防に多くの整形外科医が関与している。そしてスポーツ医学の目的は一般国民が頑健且つ健全な肉体を形成する努力を援助することに他ならない。登山医学では脚力、精神力は無論のこと、細心の判断、生命を懸けた行動、特に天候の動き、ルートの方向性の確認、滑落の注意などが必要となる。最近新聞や雑誌そしてテレビなどで登山事故を題材とした番組が多い。中・高年の登山人口の増加、それに伴う事故の多い昨今、スポーツ医学会のテーマの一隅にでもこの方面の問題点を取り上げるのも一考かと思う。

さて蛇足ながら申し上げると小生、決して“タマ”嫌いなのではなく結果がついてこないのが弱点。因みに一例を申し上げますと整形外科医の集りで時々行われるゴルフ。小生この10数年間一度たりとも譲ったことのないタイトルは“ブービーメーカー王”である。そしてこの賞をもらう度に“タマ”が縮み上がっている。“そこで瞬時に思うのが女だったらよかったのになあ”と。

■ スポーツによる運動器健康向上への取り組み

第 28 回学術集会 会長 山本 博司

我が国の少子高齢社会は益々その傾向を強めている。国も少子対策を試みているが成果がみられず、少ない子供たちを如何に逞しく育てるかが求められている。高齢者に対しても介護者を減らし生き甲斐のある健康寿命の延伸が国民と国の大きな課題となっている。

逞しい青少年を育て、高齢者の生き甲斐のある活動を維持させる重要なキーワードは「運動器の健康」である。日本整形外科学会スポーツ医学会の38年の歴史を振り返ると、スポーツに関わる運動器障害を治療し予防し、スポーツ振興を通して運動器健康推進のために本学会の多くの先人たちは努めて来られた。これまでは活動的な世代のスポーツ医学対策に意が注がれて来たが、スポーツは活動的な世代だけでなく中高年齢世代にとっても重要である。私が第28回日本整形外科学会スポーツ医学会学術集会を開催させて頂いた時に「健康づくりのためのウォーキング科学」をテーマの一つに取り上げさせて頂いたことが思い出される。少子高齢社会が進む我が国では、青少年から高齢者までの全ての世代の運動器健康向上・維持がとりわけ重要な時を迎えているといえよう。

Bone and Joint Decade(2000-2010)世界運動がWHOの支援を受けて2000年にスタートした。これはこれまで社会から注目されてこなかった筋骨格系の健康推進に世界96カ国が参加したキャンペーン活動である。我が国では、当初「骨と関節の10年」と呼ばれていたが2002年より「運動器の10年」と呼称され、47学術学会など72団体が参画し国民運動が展開されて来た。世界各国の活動は国によって異なり、例えば英国では関節リュウマチ、オーストラリアでは骨粗しょう症、米国では姿勢、ブラジルでは交通外傷に活動の主眼を置いてきた。我が国では世界に例を見ない「スポーツによる運動器健康推進」を活動の主軸の一つとして国民の啓発運動を進めて来た。日本体育協会、全国高等学校体育連盟、日本中学校体育連盟、高校野球連盟、全日本軟式野球連盟、日本ウォーキング協会など9スポー

ツ団体と連携し、スポーツ障害の防止に向けて指導者講習などを行って来た。

2011年からは、Bone and Joint Decade(2011-2020)の第2次世界活動が「Keep People Moving」のスローガンの下に始まり、我が国でも「一般財団法人運動器の10年・日本協会」が組織され、国民の運動の健康向上のための活動が進められている。第1次活動と同様に、青少年の健全な育成のための活動が継続され展開されている。その柱となるものは、「学校の運動器検診体制の整備・充実事業(武藤芳照担当理事)」並びに「成長期のスポーツ外傷予防啓発事業(高岸憲二担当理事)」である。「学校の運動器検診体制の整備・充実事業」は、日本医師会・日本学校保健会と連携・協力して、文部科学省スポーツ・青少年局に対し「学校保健安全法施行規則の一部改正」並びに「児童生徒の健康診断マニュアルの改正」を目指し働き掛けを行っている。「成長期のスポーツ外傷予防啓発事業」は全日本軟式野球連盟並びに日本整形外科学会と協力して、野球少年の投球障害予防のための教材を作成し、スポーツ整形外科ドクターと理学療法士がスポーツ指導者や保護者を対象に啓発活動を行うものである。本学会の会員諸氏にも、「運動器の10年・日本協会」の運動器健康推進活動にご支援を賜りたいと願うものである。

「Keep People Moving」は青少年から高齢者までの全てのライフステージの人達の幸せの原動力となる。「青少年世代の逞しい心と体を育成するスポーツ」、「働く世代の意欲を高めるスポーツ」並びに「高齢世代の健康寿命を延伸する健康スポーツ」の重要性が高まっている時に、日本整形外科学会スポーツ医学会の会員諸氏がこれまで積み重ねてこられた研鑽と活動を基にして、正しいスポーツ活動によって運動器の健康維持向上させることの大切さをあらゆる機会を通して国民の方々に熱く語り掛けて欲しいと願うものである。

■ 日本整形外科学会 スポーツ医学会の今後を考える

第30回学術集会 会長 青木 治人



私が本学会の学術集会の会長を務めさせていただいたのは2004年の事である。それまでの数回は、やや参加者数が減少傾向にあったので何とか歯止めを掛けたい、という気持ちもあった。そこで考えたのは、学術集会の方向性をはっきりと二つ打ち出したい、という事であった。

一つは、今まではスポーツ選手の怪我を治すという、医療者側がスポーツ選手に手を差し出すことに主眼が置かれていたが、今後は、それだけではなく、スポーツの持つ効用を医療の面で応用しようとする考えである。つまり、医療、医学と、スポーツとの双方向性の関係を作り上げたい、と考えたことである。

もう一つは、今までは待ちの医療、すなわち、選手が怪我をして病院に来た時に高度な技術で治療する、という状態であったのを、今後はそれをさらに充実させることは当然として、その上でもっと積極的に現場に出ていく姿勢の重要性も強調したかったことである。一般医療が患者さんのニーズに応えなければならないと同様に、スポーツ医学では、少なくとも選手、コーチたちが何を求めているかを知らなければ決してスポーツ界からの信頼は得られないからである。スポーツの現場では、包括的な知識が要求される。肩だけ、膝だけ、と言ったある部位だけを見れば済む、ということはないのである。そのためにも、スポーツの現場では何が求められているかを知ることはとても大切なことなのである。

以上のような考えで学術集会を開催させていただいた。おかげさまで参加者も多く、演題数も少しではあるが盛り返すことができた。

さて、その後の理事会で、私が井形前理事長の後を受けて、本学会の理事長を拝命した。その後の基本方針は、学術集会会長の時の基本的考えと大きく変わることはなかった。

理事長になって最初に直面した大きな問題は、本学

会と他学会との統合を図るか否か、ということであった。具体的に言えば、膝関節学会、関節鏡学会との統合問題である。2006年と2007年は三学会が共催という形をとることがすでに決まっていたので、それをさらに推し進め、学術性をより高めたいという考えに基づいた構想である。

何を以て学術性が高いかを判断することは難しいが、それより何よりも、一つの部位の治療に特化した研究をする学会と、部位に限らず一つの治療手段を研究する学会、そして、スポーツという、部位や治療法ではくれない総括的な分野を対象とする学会とが統合することにはどうも無理があると考え、本学会は独立して存在する道を選んだ。

同時に、それまで医師だけに閉ざされていた学会の門を、関連職種にまで少しではあるが、間口を広げることも行った。これはただ単に会員数や参加者の増加を狙うという小さな考えから発したのではなく、スポーツ現場のニーズをより広く汲み上げよう、そして、直接現場にいる人たちが参加することで、スポーツ界に医学の重要性をもっと認識してもらおう、という考えから出た措置であったのである。つまりスポーツ界に厳として存在する伝統主義や経験主義に、もっともっと科学性を持ち込もうとする考えである。これらのことは全て、本学会の「将来構想検討委員会」で十分な議論を経て進められたのである。

もちろんこれらの方針が、今後の本学会の発展にどのような効果があるかは、すぐには評価できないかも知れない。しかし、今までのところを見ると、会員数も増え、演題数も増え、しかも参加者も以前では想像もつかないくらい増えている。討論も活発である。スポーツ現場のニーズに十分こたえていると考えていいだろう。

もちろんこれら成果は、すべて各学術集会の会長のご努力によるところであるが、まさに「スポーツ」というキーワードで選ばれた先生だからこそ、スポーツ医学への情熱を思う存分注ぎ込んだ企画が立てられたものだと思う。

今後の本学会のますますの発展を期待している。

■ JOSSM-USA トラベリングフェロー 報告

筑波大学整形外科 金森 章浩

今回 7 月 11 日から 28 日まで 2012 年度 JOSSM-USA Traveling Fellow に北大近藤先生、大阪医大三幡先生とともにご選出いただき、米国 5 都市を訪問してきました。

7 月 11 日-7 月 15 日 ボルチモア

メリーランド州のボルチモアで今年の AOSSM が開催されました。教育研修講演では、スポーツ医としていかにメディアに対応するかなどと日本ではお目にかかることのないものもありました。その後も 1 会場なので、普段聞くことのない肩や肘の最新知見も勉強することができました。午後はフリーとなり、時差ぼけの調整にはちょうど良く、夜は学会場の隣カムデンヤードでメジャーリーグの試合観戦を楽しみました。

7 月 15 日-7 月 18 日 ピッツバーグ

1997 年から留学していた場所ですが、ピッツバーグ大学のスポーツ医学はすっかり様変わりしていました。変わっていなかったことは Freddie Fu 先生の早口の英語と素晴らしいホスピタリティでした。Sports Medicine Complex はアメフトチームの練習グラウンド、外来とリハビリテーションの建物、そして研究棟からなる夢のような施設でした。手術室では Fu 先生の Double bundle ACL 再建を初めて見学させていただき、昔よりさらに増えたギャラリーの中、以前と変わらぬ手さばきであつという間に手術を終えられました。研究部門もバイオメカから幹細胞まで全てそろっており、日本からもたくさんの先生方も留学されて活躍されていました。

7 月 19 日-7 月 22 日 レキシントン

雷雨によりシカゴで足止めを食ったため半日遅れてケンタッキー州レキシントンに到着。レキシントンクリニックの Ben Kibler 先生は Mr Scapula として肩甲骨を中心とした肩の保存治療で有名な先生ですが、テニスのスポーツ医学でも大変高名な先生です。到着が遅れたため残念ながら手術の見学はできませんでしたが、クリニック内の広いリハビリ室で投球障害のリハビリトレーニングを見学させていただきました。



図：ピッツバーグ大学手術室で Freddie Fu 先生と。
右より、三幡先生、Fu 先生、近藤先生、金森。

7 月 22 日-7 月 25 日 ペンサコーラ

フロリダ州ペンサコーラの Andrews Institute を訪問。海岸沿いのリゾートですが、ここに全米各地からスポーツ選手がやってきます。James Andrews 先生は全米スポーツ整形外科の父と尊敬されている先生で、我々の訪問した日も 4 つの手術室を使ってメジャーリーガーや NFL 選手 5 人の手術を午後 2 時まで完了させてしまいました。それだけでも驚きですが数週間前に頸椎の手術をご自身で受けられていたとのこと、鉄人です。

7 月 25 日-7 月 28 日 サンフランシスコ

ダラスを経由して、サンフランシスコへ。カリフォルニア大学サンフランシスコ校の Ben Ma 先生を訪問しました。彼は私より年下ですが、こちらの Sports Medicine のチーフとして活躍しています。ACL と軟骨損傷の画像診断ミーティングに出席しましたが、整形外科の医者は数名なのに放射線下の医師・研究者は 20 名近くいたのには驚きました。

今回の訪問で一番感じたことは、外来・手術・リハビリというスポーツ整形外科の基本が、単独施設で非常に効率よくこなわれているということでした。いずれの先生方も多くの手術をこなしますが、そのようなシステムを大学病院という枠組みの中でも構築できるように頑張っ

いきたいとの思いを強くいたしました。

最後になりますが、今回の JOSSM-USA Traveling Fellow については訪問先の決定を含め別府教授を始め

とする日本整形外科学会スポーツ医学会国際委員会の先生方には大変お世話になりました。来年以降も Fellowship が有意義なものとなるよう精進したいと思います。

■ JOSSM-USA Traveling Fellow 報告

北海道大学病院スポーツ医学診療科 近藤 英司

1. はじめに

筆者は、第1回 JOSSM トラベリングフェローとして金森章浩先生、および三幡輝久先生とともに2012年7月11日から約2週間、米国整形外科スポーツ医学会(AOSSM) 学術集会および米国の3つの医療機関を訪問致しましたので、その概要を報告させていただきます。

2. AOSSM2012 Annual Meeting (7/12-7/15)

ボルチモアで4日間に渡り開催された AOSSM は、スポーツ外傷・障害に関するシンポジウム、レクチャーなどがあり、特に脳震盪、頭部外傷やその予防、競技スポーツ復帰のためのリハビリテーションが重要なテーマの一つでした。会場横には、ボルチモア・オリオールズの本拠地「カムデンヤーズ」があり、野球観戦も楽しみました。

3. University of Pittsburgh Medical Center : UPMC (7/15-7/18)

ピッツバーグ大学医療センターは、非営利団体の経営による病院としては全米でも屈指の規模を有し、医療センターのモデルとなっています。Freddie Fu 先生は、充実した見学プランを組んでくださり、多くの研究施設や Sports Performance Complex を訪問しました。手術は、同種腱を用いた2束 ACL 再建などを見学しました。最終日は、ACL ミーティングに参加し、忙しくも楽しい4日間でした。

4. Shoulder Center of Kentucky, Lexington Clinic (7/18-7/22)

Shoulder Center of Kentucky は、Ben Kibler 先生が設立され野球をはじめとして多くのスポーツ選手の治療をされている施設です。病院では、肩甲骨周囲筋断裂に対する修復術や投球の障害予防、肩関節に対するリハビリテーションなどを紹介して頂きました。講演会では、肩甲骨の機能、腱板損傷後のリハビリテーションなどの講演が行われました。ケンタッキー州レキシントンには、ダービー、バーボンの産地として有名であり、最終日は、サラブレッドの牧場やウイスキー蒸留所を見学しました。



図：Ben Kibler 先生のご自宅でのパーティー

夕食会では、Kibler 先生のご自宅に招かれ、奥様の伴奏で州歌である My Old Kentucky Home を皆で合唱するなど暖かいおもてなしを受けました。(図)

5. Andrews Research & Education Institute (7/22-7/25)

フロリダ州にある Andrews Institute は、NFL、NBA をはじめとして MLB の選手が多く受診する病院であり、巨大なリハビリテーション施設、研究施設を併設し、米国のスポーツ選手だけではなく、他国の代表チームにも使用されています。病院では、バイオスキルラボ、Athlete's Performance Center などを見学しました。手術は、UCL 再建術、上方関節唇修復術など5例の見学をしましたが、4例が現役のメジャーリーガーでした。最後の夕食は、James Andrews 先生のご自宅に招待され、先生自らバーベキューをして下さりました。

6. おわりに

今回の研修旅行は、別府諸兄先生をはじめとして国際委員会の先生方のご尽力により非常に有意義な研修を受けることが出来ました。稿を終えるにあたり、貴重な機会を与えてくださいました JOSSM 理事長である高岸憲二先生、国際委員会の先生方に深く御礼申し上げます。

■ 2012 JOSSM-USA Traveling Fellow 体験記

大阪医科大学整形外科 三幡 輝久

平成 24 年 7 月 12 日から 27 日まで、JOSSM-USA traveling fellow としてアメリカを訪問させていただきました。近藤英司先生（北海道大学）と金森章浩先生（筑波大学）とともに、AOSSM annual meeting (Baltimore) に参加したのちに、University of Pittsburgh、Lexington Clinic (Kentucky)、Andrews Institute (Pensacola)、そして Kerlan-Jobe Orthopaedic Clinic (Los Angeles) を訪問しました。各施設 3 日間程度の滞在でしたが、それぞれの病院がスポーツ整形外科に関しては世界でも最先端の医療を行っておられるので、紙面では書ききれないほどの多くの勉強をさせていただきました。各施設の詳細については、学会誌に掲載予定ですので、ここではそれぞれの病院の特色を簡潔に報告させていただきます。

1. University of Pittsburgh (2012/07/15~18)

Pittsburgh は、地元の NFL チーム “Steelers” の名にも見られるように、かつては鉄鋼生産の中心地として栄えておりました。しかし 1980 年代に安価な鉄鋼が輸入されるようになったために地域の鉄鋼業は衰退し、医療と教育の町へと転換されました。そのため今では UPMC (University of Pittsburgh, Medical Center) は町のシンボルとなっています。

今回は Freddie H. Fu 先生を訪問させていただきました。Fu 先生は臨床だけでなく、基礎研究の分野でもたいへん著名な先生であり、日本整形外科学会スポーツ医学会の先生方はよくご存じのことと思います。日本人だけでも 7-8 人の fellow の指導をされており、後進の指導にもたいへん力を入られている先生です。機関銃のように多くの話をされますので、本当に頭の回転が速い先生であると感じました。整形外科のカンファレンスで、私は Arthroscopic Superior Capsule Reconstruction (鏡視下上方関節包再建術) の話をさせていただいたのですが、Fu 先生の専門外の内容であるにもかかわらず、たいへん興味を持っていただき、楽しく discussion させていただきました。

2. Lexington Clinic in Kentucky (2012/07/19~21)

Lexington はケンタッキー州中央部に位置し、競走馬の生産で広く知られています。また工業が盛んであり、州の特産物であるバーボン・ウイスキーなどの醸造は特に有名です。最終日の休日には、我々も競走馬の牧場と、バーボン工場に連れて行っていただきました。

ここでは “Mr. Scapula” と呼ばれている Ben W. Kibler 先生を訪問いたしました。Lexington Clinic は決して大きくはない private clinic ですが、かなり巨額の NIH grant を獲得されており、University of Kentucky と共同研究をされているとのことでした。Kibler 先生は、“スポーツ障害の予防” に関する研究に力を入れておられるため、私の “投球障害肩に関するバイオメカニクス” の研究発表には、かなり興味を持っていただいたようです。スライドコピーを依頼され、さらには共同研究をしたいとも言っていただきました。

3. Andrews Institute in Pensacola (2012/07/22~24)

Pensacola は、フロリダ州北西端に位置する港湾都市です。メキシコ湾岸屈指のビーチを有しており、さらには治安も良好ですので、観光都市としても人気が高い町です。しかし日本の旅行会社はそれほど宣伝をしていないようで、日本からの観光客をほとんど見かけませんでした。

Overhead athlete の治療では、世界的にも第一人者として活躍されている James R. Andrews 先生を訪問させていただきました。かなり多忙な先生であり、Andrews 先生を訪問させていただくのは非常に難しいと聞いております。しかしこのたびは、別府諸兄教授にご尽力頂くことで実現いたしました。心から感謝を申し上げます。

Andrews Institute はリゾートホテルのような外観、内装となっており、教えてもらわなければ “この建物が病院である” と気づく人は少ないと思われます。このような建物にしているのは、“受診された患者様に少しでもリラックスしてもらうためである” とお聞きし、精神面からも治療



図：Kerlan-Jobe Orthopaedic Clinicにて。
左は Frank Jobe 先生と私。右は Francis Yamazaki 先生と私。

を行うという Andrews 先生のポリシーが感じられました。

5 件の手術を見学させていただきましたが、3 人が major league の pitcher で、1 人は NFL のフットボール選手であり、この病院の患者様は有名人である確率がかかなり高いようでした。このような著名な先生に私の presentation を聞いていただき、さらには十分に discussion していただけたのは、この traveling fellow に参加させていただいたからこそと思います。本当に貴重な経験をさせていただきました。

4. Kerlan-Jobe Orthopaedic Clinic in Los Angeles (2012/07/25 ~ 27)

カリフォルニア州にある Los Angeles は、ニューヨークに次いで全米 2 位の人口を有し、アメリカ西海岸を代表する都市の一つです。MLB のドジャース、エンジェルス、NBA のレイカーズ、クリッパーズ、NHL のキングス、MLS のギャラクシーなど、Los Angeles にはプロスポーツチームが多数存在することからわかりますように、スポーツがたいへん盛んな町です。

私は Kerlan-Jobe Orthopaedic Clinic の先生方とは 10 年来的付き合いがありますので、今回の訪問は、私にとりましては自分の病院に戻ってきた感覚で、同窓会のように楽しく過ごさせていただきました。Frank Jobe 先生とも久しぶりにお会いし、20 分ほど楽しく話をさせて

いただきました。ここ数年は頸椎、腰椎の手術を 4 回も受けられており、歩行はかなり不安定になっていましたが、毎日リハビリを頑張っておられるとのことでした。また Kerlan-Jobe Orthopaedic Clinic の medical director で麻酔科医の Francis Yamazaki 先生には、今回大変お世話になりました。日系 3 世の先生で、全く日本語は話せませんが、気持ちは完全な日本人です。Francis と話していると、いつも日本人と話しているような気になるのですが、ふと気づくと英語で会話しているというのは面白いところです。初日の夜には、University of California, Irvine, Orthopaedic Biomechanics Laboratory の Thay (Lee 教授) も私に会いに来てくださって、行きつけの“KOI”という名のお寿司屋さんで楽しく食事をさせていただきました。

かなり tight なスケジュールで休む暇はほとんどなく、予想以上にハードな旅でした。しかしそれ以上に、素晴らしい経験をさせていただき、本当に参加できてよかったと感じております。また近藤先生、金森先生と一緒に旅をすることができたからこそ、今回の traveling fellow がさらに充実したものになったと思います。今後は日本整形外科学会スポーツ医学会に恩返しをさせていただくためにも、この経験を生かしてさらに頑張っていきたいと思っております。本当にありがとうございました。

お知らせ

1. American Journal of Sports Medicine (AJSM) の購読について

本学会の会員は、American Journal of Sports Medicine (AJSM: 年 12 冊発行) を特別優待価格で購読することができます。

	一般価格	特別優待価格
AJSM 購読	\$183.-	\$102.-
オンライン購読	一般向けサービスなし	\$ 30.-

AJSM 購読、オンライン購読のどちらにお申し込みいただいても、1972 年の創刊号以降の全刊行物にアクセスが可能です。特別優待価格での購読を希望される会員のかたは、事務局あてメールにて購読希望である旨をご連絡ください。(info@jossm.or.jp) 追ってお申し込みについてのご案内をお送りしますので、各自購入手続を進めてください。

2. 会員登録情報の変更について

勤務先、自宅、メールアドレスに変更がありましたら、お早めに事務局あてメールにてご連絡ください。(info@jossm.or.jp) ご連絡がない場合、学会雑誌をはじめ事務局からのご案内がお手元に届かないことがありますのでご了承ください。

編集後記

スポーツ整形外科医には、病院で高度な医療技術によって怪我をしたアスリートの機能を回復させる者と、競技の現場で発生する様々な医学的要求に応える者の二種類あると思います。今年の学術集会では筒井会長のご意向で、競技現場で活動するスポーツ整形外科医のために、専門部位ごとの割り付けではなく、競技種目毎でのセッションが開かれました。どうしても病院で専門部位の看板を掲げて診療していると知識や経験が偏りがちになりますので、広い視野を得る良い機会になったと思います。私が参加したバレーボールのセッションでは驚くほど多くの方が熱心に討議していました。今後の本学会の道筋を明示して下さった様に感じます。

2012 年のロンドン五輪では、国立スポーツ科学センターやマルチサポート事業による科学的サポート態勢が充実しました。メディカルサポートが競技力向上に与える影響を計ることは難しいのですが、今夏の史上最多 38 個のメダル量産には少なからず貢献したと思います。スポーツ界はオリンピックイヤーを終えて、次の目標に向かって走り出しています。本学会には今後ますますスポーツ界のニーズに応えられる様な活動が求められていくことと思います。

(金岡恒治)

日本整形外科学会 スポーツ医学会 ニュースレター No.12 2013 年 1 月 31 日発行

編集：日本整形外科学会スポーツ医学会広報委員会

酒井 宏哉(担当理事)、亀山 泰(委員長)、川上 照彦(アドバイザー)

大槻 伸吾、金岡 恒治、杉本 勝正、戸祭 正喜、山崎 哲也

発行：一般社団法人日本整形外科学会スポーツ医学会

〒102-8481 東京都千代田区麹町 5-1 弘済会館ビル 株式会社コングレ内

TEL 03-3263-5896 / FAX 03-5216-3115

E-mail info@jossm.or.jp URL http://jossm.or.jp/